

ねりま健育会病院 事務部/ 総務 小西千裕、人事 櫛引朋美

- 功 績 歩道上で自転車と接触して転倒、動けなくなった高齢の女性に、バス停からただ一人声を掛けて介助し、駆け付けた同僚と2人で病院の車に乗せて近隣の病院まで運んだ功績。
- 推 薦 者 人事 嵐田
- 推 薦 理 由 目の前で困っている人に対し、当院理念である「心温まるホスピタリティ」を実践し、グループのスローガンである「愛情をもって親身に対応」を具現化した2名の行為は、医療従事者としての鑑であり、他の範となすべきもので、理事長賞に推薦したい。

内 容

昨年の冬、町内居住の女性(90歳代)が、病院近くの歩道上のバス停で自転車と接触して転倒。バス待ちで居合わせた総務職・小西が「大丈夫ですか」と声を掛けた。周りの人は来たバスに乗り込み、小西一人残された。女性は「痛い、痛い」と起き上がれないため、抱きかかえて歩道の端まで寄せ、バス停前のお店で椅子を借りたが、手は貸してもらえなかった。

小西も、それ以上は身動きが取れないため、病院事務所に電話で助けを求め、居合わせた人事職・櫛引が駆けつけた。救急車を呼ぼうとしたが、「娘に電話が繋がらない。救急車で遠くに連れていかれては困る。近くのM整形でいいから」と懇願されたため、病院の送迎車に乗せてM整形に送り届けた。二人は、当院の職員であることは敢えて名乗らなかった。

自転車を運転していた年配の女性からは、後日、「動転して困っているときに、親切に励まして助けて頂いて、ありがたかった」とお礼のご挨拶を頂いた。

女性は、左大腿骨頸部左・橈骨遠位端骨折が判明、S病院に救急搬送され、人工骨頭置換を受けた。歩行障害、トイレ・移乗・入浴全介助の状態で当院入院。「一人暮らしに戻りたい」と懸命にリハビリに励み、最終的に歩行・ADL回復、左手指も麻痺なく使える状態となって、転院から2ヶ月で自宅退院された。病棟では、看護師に「ここに連れて、本当によかった」とよく口にされていた。

当院職員が救助したことが、最後まで女性に伝わることはなかったが、2人の行為があつてこそ、最終的にリハビリテーションを経て、日常生活に復帰することができた。

最近も、同じバス停で、高齢の女性が膝折れして転倒した場面に、たまたま当院職員が遭遇したことがあった。バス通りの反対側を荷物を抱えて急いでいたため、一瞬迷いもあったが、小西・櫛引の話を思い出して、「ここは医療従事者として行動しなければならない」と、荷物を置いて駆けつけ、助け起こして救急車を手配した。

目の前の苦しんでいる人に対して自然に手を差し伸べて支える行為は、まさに医療従事者としてのホスピタリティの鑑であり、2人の行動が、他の職員の範となって組織に浸透したものと思われる。